

特攻勇士に感謝と敬意を



第113号

公益財団法人 特攻隊戦没者
慰霊顕彰会

〒102-0073 東京都千代田区九段北
3-1-1靖国神社遊就館内・地階

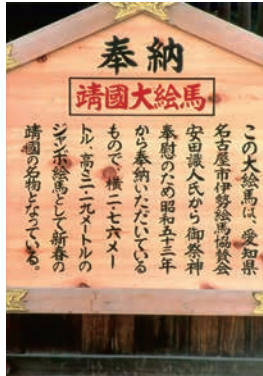
電話 03 (5213) 4594
FAX 03 (5213) 4596

<http://www.tokkotai.or.jp>
振替口座 00140-6-59580

編集人 飯田正能
発行人 石井光政
印刷所 ヨシダ印刷株式会社

目次

特攻勇士に感謝と敬意を	1
平成29年 年頭のご挨拶	2
謹賀新年	3
特別攻撃隊員の遺書	4
白鷗遺族会編『雲ながるる果てに』の紹介	8
平成29年度慰霊行事予定	4



平成29年 年頭のご挨拶

理事長 藤田 幸生



皆様、明けましておめでとうございます。

今年も、平和平穩の内に初春を迎えられましたことを、皆様と共に慶び、御英霊に感謝申し上げますと思います。

それぞれの地域、お一人お一人におかれましては、災害その他で、現在もご苦勞をされておられるかと存じます。それらの皆様には、心からお見舞い申し上げますとともに、1日も早く、平穩な生活が訪れますようにとお祈り申し上げます。

私達が、祖先から受け継いでまいりました、この日本という国が存在する地域は、天災の多い、小さな洋上の少資源の国であります。その一方で、四季のある、自然豊かな風土に恵まれ、努力すれば、生きるため

の十分な糧を育んでくれるところでもあります。それ故に、祖先が育み創り上げてきてくれたこの日本という国は、幾多の苦難を乗り越えて、人として素晴らしい生き方のできる、世界に類を見ない程の国になってきております。誇らしく思うと同時に、先人に対して、心からの感謝の気持ちを捧げたいと思います。

一方で、世界の今の情勢を観ますと、我が国周辺におきましても、この平和平穩な世界を維持することが、如何に困難な情勢にあるかを、認識せざるを得ません。すなわち、「イスラム国」による混乱、「ソマリア沖海賊」による混乱、UKのEU離脱等の混乱、米国、フィリピンにおける大統領選挙の結果等、世界は激動し、一層、混沌とした情勢に向かっていくようにさえ伺えます。

翻って、国内の情勢を顧みれば、台風、地震、津波、火山噴火等の自然天災から逃れることは出来ません。加えて、周辺諸国との間では、拉致、領土等の諸問題、国土保全上の問題、自由貿易上の制約等が顕在化してきております。このように、自然災害や人口構造の歪等の人災も含めて、今後、安全無事、発展的に国を営んでいく上での諸問題が、散見されてきています。

我が国は、このような時、幸いなこ

とに、安定した第2次安倍政権を頂いております。戦後70年に当たる一昨年以降、この政権によって、国の内外に示された日本の基本姿勢は、本来の歴史的な国の在り方を踏襲しているもののように伺えます。多くの国民は、このことを深く認識され、慶び、強く支持されております。これらは、混乱する世界情勢の中で、本当に有り難いこととです。幸運なこととです。大きな神のご加護、御英霊のご加護を感じずにはおられません。その意味において、今年も、我が国にとって、今後の国の在り方を方向づけ、定着させる重要な1年になるのではないかと思われます。

私達も、特攻隊戦没者慰霊顕彰会の活動を通じて、御英霊の皆様と共に将来に向かつて、誤りのない正しい道を歩んでまいりたい、国の発展に寄与していきたいと、心から念願しているところでです。

その公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会は、今、大きな転換期にあります。終戦直後、この会の前身が、特攻作戦の指揮官や戦友の皆さんによって組織されました。その後、御遺族、御家族等を中心に、活動してまいりました。そして今、戦後70余年の時を経て、指揮官、戦友、御遺族の皆様が、次の世代に移ってきております。現在は、自衛隊OBの皆さん、一般の国民

の皆様の入会で支えられてきているのが現状であります。今後は更に、多くの一般国民の皆様に移行し、この活動が支えられて行くようにならなければならぬと考えております。亡き子の年を数えるのではなく、今我ががなすべきこと、出来ることを考えてまいりたいと思っております。会の活動を、広く一般国民の皆様にも広めてまいりましょう。

そのための心構えの芯柱として、御英霊の皆様にご加護を賜りつつ、「我が国が、益々健全に安定して発展してまいりますよう！」そしてまた、特攻隊戦没者慰霊顕彰会にとりましても、今年が、良い1年になりますようにと、会員の皆様と共に祈念し、努力してまいります。

皆様、この1年、どうかよろしくお祈り申し上げます。

皆様、この1年、どうかよろしくお祈り申し上げます。

謹 賀 新 年

公益財団法人 偕行社

会 長 志摩 篤
 理事長 富澤 暉
 副理事長 塩田 章
 副理事長 深山 明敏
 副理事長 白石 一郎
 副理事長 大越 兼行
 専務理事 小柳 毫向
 理事 若木 利博
 兼事務局長

公益財団法人 水交会

会 長 藤田 幸生
 副会長 古庄 幸一
 理事長 齋藤 隆
 副理事長 加藤 保
 専務理事 赤星 慶治
 事務局長 本多 宏隆

つばさ会

会 長 吉田 正
 副会長 外蘭健一朗
 副会長 溝口 博伸
 副会長 戸田眞一郎
 副会長 片山 隆仁
 副会長 鹿股 龍一
 専務理事 長島 修照

公益財団法人 大東亜戦争
全戦没者慰霊団体協議会

会 長 島村 宜伸
 理事長 柚木 文夫
 専務理事 圓藤 春喜
 常務理事 岩田 司朗
 兼事務局長

公益社団法人 隊友会

会 長 藤縄 祐爾
 理事長 先崎 一
 常務理事 増田 好平
 常務理事 吉川 榮治
 常務理事 外蘭健一朗
 常務執行役 (総務担当) 寺田 和典
 事務局長 植木美知男

東郷神社

東郷会

宮 司 福田 勉
 名誉会長 東久邇信彦
 会 長 友國 八郎
 副会長 田内 浩
 兼理事長 伊藤 和雄
 編集長 関 秀充
 事務局長

公益財団法人 海原会

理事長 堺 周一
 副理事長 酒井 省三
 副理事長 菅野 寛也
 専務理事 助村 隆典
 兼事務局長

公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会

会 長 杉山 蕃
 理事長 藤田 幸生
 副理事長 岩崎 茂
 専務理事 衣笠 陽雄
 理事 白田 智子
 理事 笹 幸恵
 理事 水町 博勝
 理事 小倉 利之
 理事 羽瀨 徹也
 理事 石井 光政
 兼事務局長 阿部 軍喜
 監事

特別攻撃隊員の遺書 白鷗遺族会編『雲ながるる果てに』の紹介

白鷗遺族会は、第13期海軍飛行専修予備学生の戦死者の遺族と生き残りの同期生の会である。いわゆる学徒出陣により昭和18年10月に、第13期海軍飛行専修予備学生として、三重や土浦の海軍航空隊に入隊した若者の総数は4726名で、それから終戦までのわずか1年10ヶ月ほどの間に1605名が戦死し、更にその内、特攻隊員として散華した若者は447名を数えた。これらの若き勇士たちの遺書、遺稿を同遺族会において取り纏め、編集・発行したのが、『雲ながるる果てに』である。

一部は、北影雄幸著『これだけは読んでもおきたい特攻の本』に簡明かつ的確な解説を加えながら紹介されているので、それを引用しつつ以下のように紹介させていただくものである。

なお、『きけ わだつみのこえ』日本戦没学生の手記』については、会報『特攻』第103号掲載の「ノーブレス・オブリージユ (noblesse oblige)」とは、学徒出陣に思う「再び「ノーブレス・オブリージユ (noblesse oblige)」とは、学徒出陣に思う」を参照されたい。

からであります。——

特攻機の命中率は10パーセントを切る。戦術的にみれば、たしかに無謀きわまる作戦である。だが特攻の歴史的意義は、命中率云々という些事ではなく、この「発刊の言葉」にもあるように、「明日のために、よりよく生きるために、そしてまた人間を人間らしく取るために、20歳になるやならずの若者たちが、その青春の炎を目いっぱい燃やして、十死零生、死ぬとわかり切った戦場に勇躍出击していったことにある。

これは世界的にみても、特記すべき稀有の事例であり、人間性の尊厳を考えると、これほど気高く、これほど美しく、またこれほど哀しい出来事はない。世界の戦争史をひもといても、このように壮烈でかつ凜冽な作戦は過去にも例がないし、今後ますます起こり得ない。いわば特攻作戦自体が空前絶後の作戦だったわけでもある。それゆえ、「発刊の言葉」はさらにこう記す。

——ペン持つ手を操縦桿に代えて大空に飛び立ち、一瞬一瞬を死との対決の猛訓練の後にも九死に一生をも期し得ぬ特攻として散っていったこれらの若人達の手記は、読む一人一人の心につきせぬ感銘をあたえるところに、平和というものがいかに尊いものであるかを

物語ってくれておるのであります。——

この痛切な思いが込められているからこそ、本書は終戦7年後の昭和27年初夏に発刊されて以降今日まで、平和を願い、そのかけがえのない平和を守るために散っていった若者たちの勇気を讃嘆、敬仰する多くの人々に読み継がれてきたのである。

それにしても、本書の題名の何と清冽、澄明であることか。ちなみにこの題名は、昭和20年5月29日に、神風特別攻撃隊振天隊の一員として沖繩海域で戦死した古川正崇という23歳の若者が出征の日に歌った次の短歌によって

雲湧きて流るるはての青空の
その青の上わが死に所

今日も一日最善を尽さん

この若者たちは、入隊時には操縦のイロハも知らない。それゆえ入隊早々から猛訓練に明け暮れる。23歳で比島方面で特攻死した市川猛は、訓練はそのまま戦闘であるとして、常在戦場の覚悟を次のように記している。

「一瞬の飛行作業もすなわち戦闘なり。救世の務めなり。最後の忠節なり。今日も一日最善を尽さん。」

最善を尽して訓練に励めば、当然操縦の腕は上がる。特攻隊でなければ敵

に撃墜されぬ限り、出撃の度に腕が上がり、戦闘度胸がつく。ところが、特攻隊員は一度出撃したら基本的には生還はあり得ない。出撃は生涯たった一回限りで、しかもその出撃はすなわち死である。これが特攻隊員と他の兵種のパイロットとの最大の違いである。

特攻隊員は訓練に励めば励むほど確実に出撃は早まる。いわば操縦の腕を上げんと最善を尽せば尽すほど、日々死が近づいてくるということになる。これほど哀しい青春はあるまい。自分の人生の目標を見出し、そこに向かつて青春の炎を燃えたぎらせる。それが青春の普通の姿である。ところが特攻隊員の場合は、人生の目標が死である。このような状況は並の青年に耐えられるものではない。

しかし彼らは耐えた。耐えてそこに人生の意義、この場合は、死ぬことの意義を見つけた。それが、美しい祖国の山河を守ることであり、愛しい故郷の人々の平穏な生活を守ることであった。こうした哀切な思いがなければ、20歳を出たか出ぬかという若者が平然と死地に赴けるものではない。そして特攻隊の青年のこの透きとおった哀しみを誰よりもよく知るのは彼の母親である。23歳で米子方面で殉職した青木三郎の母は、飛行機乗りになりたいと

いう三郎に次のように語っている。「どうせ一度は国のお役に立たねばならぬ体、それならば男として名のあのような立派な働きをしておくれ。お前が飛行機に乗ろうが乗るまいが、私は少しも考えない。お前がこうと思つた男のやる仕事で、私は満足だ。男らしい仕事をするのが一番だ。今日の話は私に相談することはない。ただお前の決心一つで定めるのだよ」

この母は、日本のどこにでもいる平凡で気の弱い女性であつたという。しかし日本の母というものは、子供の運命がこごとという時には、本人自身も驚くような凛とした態度を往々にしてとる。この母の言葉に三郎は大いに感銘し、次のような言葉を述べている。――このような母の力強い言葉をきくと、平凡だけれども常に表面に表わさぬ強さを感じられる。このような母の態度は、日本人の誰も誰も心の中心に、高い道徳的位置をもつて激しきまでも根ざされている。私は母のこの激励の言葉を後にし、きつとやるぞきつとやるぞと誓つた。――

お母さん、決して泣かないで下さい

出撃してゆく特攻隊員は、両親や兄弟姉妹、あるいは妻や子や恋人に様々な感慨をもつ。なかでも母への思いは

とりわけ哀切である。たとえば、23歳で台湾高雄にて殉職した富田修は、母へこう書き残している。

お母さん、御安心下さい。決して僕は卑怯な死に方をしなさい。お母さんの子ですもの。

――それだけで僕は幸福なのです。

日本万歳万歳、こう叫びつつ死んでいった幾多の先輩達のことを考えます。お母さん、お母さん、お母さん、お母さん！

こう叫びたい気持ちで一杯です。何かいって下さい！一言で充分です。いかに冷静になつて考えても、いつもいつも浮かんできてくるのは御両親の顔です。父ちゃん！母ちゃん！

僕はこう何度もよびます。

この「父ちゃん！母ちゃん！」こそまさに魂の叫び以外の何物でもない。そしてこれは富田のみならず、若い特攻隊員全員の魂の叫びでもあるのだ。さらに富田は、「飛行機乗りは必ず死するものであります」と前置きして、この手記をつぎのように締めている。「お母さん、決して泣かないで下さい」

隊員の万感の思いがこめられている。「ではまた」何なのだろう。「ではまたお会いできる日を」ではあまりに悲しすぎよう。特攻隊員に明日という日はない。それゆえ逆に、今日という日を精一杯に生きて、己れの生の証とせねばならなかったのである。

また、特攻隊員には妻帯者もいる。当然、妻も若い。特攻隊員となればその相愛の二人が離れ離れで暮らさねばならぬどころか、死に別れしなくてはならないのである。

25歳で鹿児島県出水沖にて特攻死した古河敬生は、戦死のまさに前日、出水航空基地から若妻につきの手紙を送っている。

「出発してよりすでに半月、便りしたいとは思いますが、心に余裕もなく御無沙汰いたしました。ちょうど、明日帰る者がいるので、好便に託します。お前に泣かれるのが辛かったので、どうせ分ることは知りながら黙ってまいりました。しかし心では感謝の言葉を、幾度繰返してたか分らない俺の心もくんで許してくれ。この頃少し心に余裕ができると、お前のこと、生まれてくる子供のことが気になってならない。どうか体にだけはくれぐれも気をつけてくれ。」

日本男子の無器用さと、その無器用

とのうちに秘められた深い愛情がひしひしと伝わってくる文章である。そして手紙は出撃の時待つ日々、「お前の写真と、悦ちゃん(妹)の写真を出しては眺め、最初にして最後の死の出撃を待っていた」と記してこう続く。「この前やってきた萩原にも、お前

石野正彦は、日常厳しく己れを律して、真正の海軍士官たらしとしている。一心卑しからば外自ら気品を損し、様相下品になりゆくものなり。多忙にして肉体的運動激しくとも、常に教養人たるの自覚を持ちて心に余裕を存すべし。教養人なればこそ馬鹿になりうるなれ。馬鹿になれとは純真素直なれとの謂なり。不言実行は我が海軍の伝統精神なり。黙々として自らの本分を尽くし、海軍士官たるの気品を存するが吾人の在るべき方法なり。吾今日痛感せる所感をあげ、もつて常住坐臥修養に資せん。――

人の命の儂なさは、今さらながら唾然とするものがあるが、この頃はだいぶ神経も太くなってきた。お前も心を太く、持って、待っていてくれ、必ず帰る。お前が子供を安産するまではそう簡単には死なないつもりだ。」

そして、石野が常に心がけたのがつぎの三点である。

だが、古河はこの手紙を書いた翌日に特攻散華する。若妻とこれから生まれてくる子を残してである。哀しいといえどこれほど哀しいこともないが、死は特攻隊員の都合には合わせてくれない。それが今日来るのかもしれないし、明日になるかもしれない。だが、一月と延びることはまずない。これが特攻隊員の宿命なのである。そしてここから、特攻隊員の透徹した死生観が生まれる。

黙々として己が本分を尽くすべし

たとえば24歳で木更津にて殉職した

一 黙々として己が本分を尽くすべし。
二 海軍士官たるの気品を備うべし。
三 男子は六分の俠気、四分の熱なかるべからず。

当時、「人生半額二十五年」という言葉が流行っていた。人生一般には五十年だが、若い軍人は二十五年を

「いよいよ出撃もあます二、三日だろう。明日より菊水四号作戦あり。一号より三号まで多大なる戦果とともに、数多の戦友は散華した。ひととせをかへり見すればなき友の

もつて寿命とするという意味である。22歳で南西諸島方面にて特攻死した牧野毅は、出撃前日に認めた遺書にこう記している。

「人生わずか五十年とは昔の人の言う言葉、今の世の我等二十年にしてすでに一生と言ひ、それ以上をオツリと言ひ。まして有三年も永生させしはゼイタクのかぎりなり。いささかも惜しまず。笑つて南溟の果てに散る。また楽しからずや。(以下略)」

生命もいらず、名誉も地位もいらず

特攻隊員たちの精神の格調の高さは、地位や名誉を求めなかつた点にはつきりと現れている。彼らがその尊い命と引き換えに求めようとしたのは、祖国の安泰であり、そこに住む人々の平和であった。これは彼らにとつては生命尊重以上の価値の所在であった。まさに透徹した死生観と言える。

数へ難くもなりにけるかな
四号作戦終れば、いよいよ俺の中隊突入の番だ。最後まで自重せん。沖繩は断じて敵にゆずらず。生命もいらず、名誉も地位もいらず、ただ必中あるのみ。深山のさくらのごとく、人知れず咲き、散るべき時に潔く散る。何の雑念も含まず。
夜十時、進出命令下る。」
武士は起つべき時に起ち、死ぬべきときに死ぬ者といわれているが、その意味からも西田はまことの昭和の武士といわなければならぬ。

例えば、23歳で南西諸島方面にて特攻死した西田高光は、進出命令が下つたその日の日記に、次のように記している。

またこの西田は、出撃の前に、「吾今日も生あり、明日の必中にこそ捧げん」と詞書して、「訣別の歌」という詩を作っている。
「……
吾等征く沖繩の空
君もまたこれにつづけ
この夕べ相離れまた生死相へだつともいつの日かまた万衆の桜を共に見ん
いふなかれ君よ
別れを世の常をまた生き死にを
空と水うつところ
悠々として雲は行き
雲は行けるを」

「いよいよ出撃もあます二、三日だろう。明日より菊水四号作戦あり。一号より三号まで多大なる戦果とともに、数多の戦友は散華した。ひととせをかへり見すればなき友の

我らの任なり」とし、「今こそ征かざれば征く時なし」と断じ、「大義に死

して悠久に生くるこそ真に男子なれ」と思いきわめていた。この一途で純粹な精神が、彼らの行動をより一層美しくしたのである。

例えば、26歳で比島方面にて特攻死した吹野匡は、母に次のような遺書を送っている。

「海軍航空隊に生活して、初めて私も悠久の大義に生きる道を悟りました。戦地に來て未だ十日ですが、私の戦友部下達の相当の数がすでに戦死しました。これらの友と部下達のことを想うと、生きて再び内地の土を踏み氣持ちにはなれません。

私は必ず、立派に戦って、悔いなき死場所を得るつもりでおります。」

戦友を見捨てないというのが戦場に立つ軍人の戦場心得の鉄則であり、戦友が志なからばにして非命に斃れたなら、その志を引き継ぐのが軍人の信義というものである。そしてその信義が根底にあるからこそ、軍人の思念と行動はなお一層輝きを増すのである。

明日なき日々を生きているのが軍人である。その点を、25歳で本州東方海上で特攻死した林憲正は、次のように記している。

「我々に明日はない。昨日もない。ただあるものは今日、否、現在のみ！」
軍人はここまで精神を緊張させなく

ては、戦闘を遂行できない。命を的に働くという言葉使用があるが、軍人の場合はまさしく字義通り命を的に働かねばならないのである。そして軍人は死ぬべきときに死ぬ。

散る桜 残る桜も 散る桜

古來、「花は桜木、人は武士」といわれ、さらに「花は散り際、武士は死に際」といわれてきた。軍人も桜に例えられる。例えば、22歳で南西諸島海域で戦死した真鍋信次郎は、次のような文章を残している。

「散る桜 残る桜も 散る桜

未だこういう大悟の境地をしかと把握してはいませんが、これはほんとうに真理だと思えます。おおよそ生をうけたものはすべて死すべき運命をもって生まれてきております。必ず死ななければならぬです。だから死すべき好機を発見して死ぬことができたら、大いに意義ある人生を過ごしたことになると思えます。御国のために死ぬということは天地と共に窮りなき皇国日本と、とこしえに生きることであると思えます。」

人の命には限りがある。命尊しと思っても、いつかは果てる命なら、死処を得ることこそ武士の本望と、昔から言われている。武士の場合は主君に

忠義を尽くすことをもって最大の職分とし、至高の死処としてきた。ところが軍人の場合は、それよりはるかにスケールが大きく、国家に忠節を尽くすことをもって大義とした。言わばこの大義を死処として、軍人という軍人は、各自の軍務に精励したわけである。

それゆえ軍人の場合は前述したように、「大義に死して悠久に生くるこそ真に男子なれ」こそが、至上の行動原理となる。例えば、前出の吹野匡は、次のように記している。

「私は必ず立派に戦って、悔いなき死場所を得るつもりでおります。
皇国三千年の歴史を考うる時、小さな個人、或は一家のことなど問題ではありません。我々若人の力で神州の栄光を護り抜いた時、皇恩の広大は小さな一家の幸福をも決して見逃しにはしないと確信します。」

このように特攻隊員は国家ということの徹頭徹尾信じていた。信じていたからこそ、祖国を護るために、勇んで死地向かうことができたのである。これも前出の林憲正は、こう記している。

「私は郷土を護るためには死ぬことができるであろう。私にとって郷土は愛すべき土地、愛すべき人であるからである。私は故郷を後にして故郷を今や大きく眺めることができる。私は日

本を近い将来に大きく眺める立場となるであろう。私は日本を離れるのであるから。そのときこそ、私は日本を本當の意味の祖国として郷土として意識し、その清らかさ、高さ、尊さ、美しさを護るために死ぬことができるであろう。」

結局、大義に殉ずるとは、若き特攻隊員にとっては、軍部がスローガンとした忠君愛国とか八紘一宇などではなく、美しい祖国の山河とそこに住む愛する人々の平和を守るために命を捨てることであつた。ここを理解しなければ特攻隊員の至純至誠の心はわからない。

本書の扉には、次のように簡潔だが、心にしみる文章が掲げられている。
「この書を
遙かなる雲の果てに眠る
あまたの
若き み霊に捧ぐ」

本書『雲ながるる果てに』の主題は、この一文の中に結晶水のごとくきらめいている。世の中が平和であるからこそ、我々は、その平和を守るための礎となつて散華した多くの若者たちがこの国に現存したことを、戦争の記憶としてではなく、平和の象徴として、永久に心に刻みつけねばならないのである。
(文責 飯田 正能)

平成29年度慰靈行事予定(当顕彰会主催及び他団体主催慰靈祭参加予定)

(慰靈行事名)

(日時・場所)

(主催者名等)

(慰靈行事名)

(日時・場所)

(主催者名等)

①第39回特攻隊全戦没者慰靈祭	29・3・25(土)	靖國神社	(公財)特攻隊戦没者慰靈顕彰会	②0指宿海軍航空隊基地哀惜の碑慰靈追悼式	29・5・27(土)	指宿海軍航空基地哀惜の碑	指宿海軍航空基地哀惜の碑顕彰会
②神雷部隊慰靈祭	29・3・21(火)	建長寺「神雷戦士の碑」前	湘南水交會	②1義烈空挺隊慰靈祭	29年6月中旬	摩文仁の丘義烈空挺隊慰靈塔	全日本空挺同志會沖繩県支部
③旧海軍鹿屋航空基地特攻隊戦没者追悼式	29・4月第1週	小塚丘公園内慰靈塔前	鹿屋市	②2大東亜戦争全戦没者合同慰靈祭	29・7月上旬	靖國神社	(公財)大東亜戦争全戦没者慰靈団体協議會
④宮崎特攻基地慰靈祭	29・4・2(日)	宮崎特攻基地慰靈塔前	宮崎特攻基地慰靈祭実行委員會	②3国分第二基地十三塚原特別攻撃隊慰靈祭	29・8・15(火)	十三塚原海軍特攻隊前	霧島高原ビール(株)全日本空挺同志會
⑤第41回郡城市特別攻撃隊戦没者慰靈祭	29・4・6(木)	都島公園内慰靈塔前	豫科練雄飛會	②4高野山慰靈祭	29・9月上旬	高野山「空」の碑前	(公財)偕行社
⑥豫科練雄飛會戦没者靖國神社慰靈祭	29年4月上旬	靖國神社	鹿兒島県伊仙町慰靈祭実行委員會	②5市ヶ谷台慰靈祭	29・9月中旬	市ヶ谷台駐屯地メモリアルゾーン	世田谷山観音寺(公財)特攻隊戦没者慰靈顕彰会
⑦第49回徳之島慰靈祭(戦艦大和を旗艦とする第二艦隊戦没者)	29・4・7(金)	大多布岬・慰靈塔前	南さつま市・萬世特攻慰靈碑奉賛會	②6第66回特攻平和観音年次法要	29・9・23(土)	特攻観音堂	原町飛行場関係戦没者慰靈顕彰会慰靈顕彰会
⑧第46回萬世特攻慰靈碑慰靈祭	29・4・9(日)	萬世特攻慰靈碑前	鹿兒島県出水市特攻慰靈塔前	②7原町飛行場関係戦没者慰靈祭	29年10月上旬	南相馬市陣ヶ崎公園墓地	大阪特攻勇士之像慰靈顕彰会
⑨第57回出水市特攻慰靈祭	29・4・16(日)	特攻碑公園慰靈塔前	靖國神社	②8大阪護國神社特攻勇士之像慰靈祭	29・10月上旬	大阪護國神社	鹿屋市
⑩靖國神社春季例大祭(当日祭)	29・4・22(土)	靖國神社	山口縣護國神社	②9旧海軍航空隊申良基地出撃戦没者追悼式	29・10・15(日)	申良平和公園慰靈塔前	靖國神社
⑪「あ、特攻」勇士之像慰靈祭	29・4月下旬	山口縣護國神社	東雲飛行場慰靈奉賛會	③0靖國神社秋季例大祭(当日祭)	29・10・18(水)	靖國神社	明野忠魂塔顕彰会
⑫秋田県「特攻勇士之像」慰靈祭	29・4月下旬	能代八幡神社	招魂祭実行委員會	③1明野忠魂塔慰靈祭	29年10月中旬	陸自航空学校明野忠魂塔前	長野縣護國神社
⑬秋田県特別攻撃隊招魂祭	29・4月下旬	秋田市川尻惣社	南九州市・知寛特攻慰靈顕彰会	③2長野県特攻勇士之像慰靈祭	29年10月中旬	長野縣護國神社	千鳥ヶ淵戦没者墓苑
⑭第63回知寛特攻基地戦没者慰靈祭	29・5・3(水)	知寛特攻平和観音堂前	福岡県特攻勇士慰靈顕彰委員會	③3千鳥ヶ淵戦没者墓苑秋季慰靈祭	29年10月中旬	千鳥ヶ淵戦没者墓苑	奉仕會
⑮福岡県特攻勇士慰靈顕彰祭	29・5・4(木)	福岡縣護國神社	郷殉国(の)碑保存會	③4神風特攻隊慰靈碑参拝	29・10・25(水)	比島バラカツト周辺	神風特攻隊五軍神特攻戦没者奉賛會
⑯第51回特攻殉国の碑慰靈祭	29・5・14(日)	特攻殉国の碑前	郷殉国(の)碑保存會	③5神風特別攻撃隊戦没者慰靈祭	29・10下旬	西条市大町榎本神社	埼玉縣護國神社
⑰京都靈山護國神社特攻勇士之像慰靈祭	29・5月下旬	京都靈山護國神社	海原會	③6特攻勇士之像慰靈祭	29・11・12(日)	埼玉縣護國神社	山口県周南市大津島
⑱豫科練戦没者慰靈祭	29・5月下旬	陸自武器学校豫科練の碑前	千葉縣護國神社	③7回天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗員追悼式		大津島・回天慰靈塔前	回天顕彰会